関ヶ原軍記 三編 三 四

特へ遠13
2207
32

門へ遠13
函2207
巻32

牛込 水 池清

関ヶ原軍記三編巻之二

目録

一鴻左近主人石田治部少輔の事
并左近友之軍配の事
一鴻津勢雪崩田中吉政破る
事
并石田勢合戦の事

繙譯書
倭軍書
唐軍書
隨筆物
國々名所
近世戦争書類
繪本
書き本
滑稽物
山東馬琴之作
其外諸先生作
軍書
敵討
諸家騒動
御捌物
右之外数品古雅珍奇稗説
東京本屋細工所
書物演説所
誠堂 山東京傳

内閣文庫

関ケ原軍記二篇巻之三

鴻巣近辺人石田三成を励

并左近友之軍配の事

去程に関ケ原の戰ひ西方

の軍師勢大将〻義ゞ大谷刑

部少輔吉隆討死す大学頭

為矢倉拵をなし人々の衰
切りより石田ごとく面を形り
をしと大谷ゞ方たの堅めをなり
平塚因幡守小川土佐守京
極丹後守等迎ひ合戦を討
死をなしてこれ戸田武蔵守を討
とゞめさせたるに切のめんく
勝利を切勝岡城場に石田小

西鴻津宮に合戦の志賀井と
ある大谷吉隆ゞ討死しこれ
未の刻より及ぶこれ
ゝ前代未聞大合戦とこれ
ゝ鴻左近友之を軍名
ゝ三十騎ばかりにて
なされく兵粮を拵方に
戦ひと足ゝ引して居りしゞ

いそぎ紀伊国ゟ来る十五日新来
致候ゟ新宮ゟ合戦も
皆味方敗軍仕候ゟ立ハ之の上
金子秀秋別ハ松尾山
ゟ下り候ゟ切出ると又
村木権右衛門 小川土佐も参
く反ん候て大谷刑部ゟ
手ハ切ゟ相戦ゟ相ゟ

大軍ゟ来迎ゟ申候
今ハ中ゟ吉隆度も討死ゟ
度ゟ小早川秀家ゟ
福島正則ゟ陰ゟ
ゟ南ゟ山ゟ味方
ハ此節大軍ゟ一度ゟ
ゟけゟ相戦ゟ責て
利運ゟ成る事やハん

ふるはれし年いらるゝ双方
親ひの掛ひを見合せく運を
直渡手掛とるめんくるれば
知るべしいま甲斐もるゝ
なり 此節下知の御もしや
と三加手とづれとり流石の
石田も今いかやそ姫とおもべ
ざる乃貴殿いと左を吹く

大ひふいなあるげまして扨く
いひ甲斐なるに年られ来し
事い今新しきりとび〳〵軍
城成られ方来ぶ筋貴殿ぶ
ふ百姓四味方と思ひ百べし
南時関来 西国二ツ手るって
うん城一時手あるそ城ひ
なれば今日代用り合戦義も

あり。く勝級まちくはして
定まりぬるの親軍は関ヶ原
いくさに勝りある事なり今
関東方は武田細川山内等を
南京山のうちをまもりて
うるさへいくさ城は金山ぞや
後く小田原をうの手南にて
鴻津どのと長籠城押出て

お戦うづ勝利をはん矢石間反
ちう
関廣公ちうん城
年そひぬへ中ちいひく蒲生
徒中と呼で友之ち何ぞや
らん呼くこれは人之如よ
討死をもめんとあり備中
ちうくちう石間の先手に寄り
主人に向ひこの時おくいで

討死を遂して御働成られ
ず勝利を始んとすもそうん
う鴻庄を軍配を付きめへ
ものなり石田も流石の者
あれども時を知り身勢をひ
ひく立て先陣に出く
下知をつたるのせり取
小西摂津守を先陣にく

石田方より鴻津が右より義弘
を攻城をあて
関府公は篠本へ討へきの
定めて小西げ手へ大筒鉄砲
にて呂今南麓山にふり
を見り石田 細川げそなへく
鉄炮城寄撃たりひとをいど
まんとの送る鴻庄近き

と報ずるとなりしかば我も
手手勢引連れて討死して雑
人をさんらんに身ぢかに
武者武拾騎手ずりとなんぐ
ゝりたるなりさいらいに左右近さい
まのすけも負ぶ傷木の強ひふ
伯母衣掛くるを見て清津が
陣にくのりつけて子細を

いぶかしく思ひ石岡も左右も
相義んで運ばぬぐりに働く
屋ゝそいひ指ゝく本陣へ立
帰り小宮むらけ左近手負疵
出て志賀思こそるきせ
義の手をとざめて岡の
ゝ忘を揚させ清津も列より岡
列要敵ひとを

うりかけるも始まる鴻ノ軍
配今いまや手勢をもて繰て
この夜勢と下知せるを聞るり
去れば彼この彼へこそ天下分目
戦ひるべしさめんく参
きと振りて居りける
鴻津勢雷猛田中吉政
破る事
并石田勢合戦の事
佐々この時小関むらしげ
鴻津与藤ノ手先平南
ヲ出て こそ田中兵部大夫
吉政ありし是大一だんの彼こと
武蓋も加度たる本朝唯なり

又石田治部少輔ハ先手ハ古田
織部正 牧左馬頭 船越左衛門
大学 織田左兵衛尉 金森出羽
守 ハ今手ハ紀伊 有て双方
籠城手ハ有ると一時ハ岡の
ゑ地あげて初うち後
ハ川の渡ハ町ハ引ふ如く
ハ鉄砲を打ると時石田

ハ先陣庵生徒中 高野城中
五人ハ五百の軍勢ハ鴨方
迄ハ下知ハ此庵ハ拵ハ
して川渡ハ出るべき風情ハ
見せ申ハ実東方ハ引ハ鉄砲
ハ打して有る受
城石田ハ先陣ハ大急ハ川ハ
と城ハ合せ籠勢急ハ

りみちる古田　鳥城　牧子等
北へ〳〵大ぶくしてそろ〳〵
石田が殿先陣ぶたち
城をそなへ既に見へ
ゆり鴻津北軍勢八千余騎
一手い鴻津中務が籠本
三千騎杉浦三所之衆　伊勢
勢郎と先をしてやく〳〵

川を渡り城へをそり寄
却をけり時の合戦父子
い声青年間の声をあげて
是程城攻しが鴻津が軍勢い
程ケ島北鉄炮の筒先城攻へて
打立るがそろ〳〵十郎より
三十目中ぢのそりちり又そろ〳〵
り玉薬を矢先を十分

て搦手を廻りと立て
打出るより金吾が勢
どもさんざに打てられ
大ひに騒動せる時手勢中
勢下知して先陣こをみより
又相メ丹波い搦手より薩摩勢
廿三百余人を作り撃連て
切立るの方さも凄敷しく

して是城立ちの級軍して
金吾を陣所を打こ交て
河ちりぢく岡中兵部大輔
ちの若大将方のあ〳〵や
強破れと下知して武千余騎
突入ちり諸陣ゲ先手武軍ち
方ち金吾を退打して岡
中ゲ方といどみ合ちの時ハ

戰ひに敗て御籠本丸先形り
されば諸人の見る目をはりと
田中が忠義を博古侯先陣よ
をんで下知しるいて晴大剛
此者何さ毋軍形るそ見へし
後ろ手鴻津中勢が後へより
横合に打いづ多の強物
多勢古侯手中馬より

志道振り返りこれを見て
鴻津中勢が軍兵強波の声
地揚く田中が勢を追立
切り崩を古政を士卒を励ま
と雖も漕るべき振も寄りり
此度振メ義池の二子金人
和度高明武雲を震て陰
とも討つ寄りたるも

家中なりさるれば金森 田中い
退去らるるとも 本加度本多
る場所を退くべしとても
雷倚の働来るのせり 極
那り理なり 内府公遠
ふ御境じて 殺や田中ぶ
切頭しも也鴻津を退くとも
出るるなり大書紙より 殺入

御下知あり 流石
度々此功名しる大書紙 庵
切るなり 家康
家康しも敵を喰ん と面く
志先るるみるい 何さるみも
さげしき有 損ちるるの人く
るる石川伊勢守 小坂助左衛門
為相又四郎 安度吉左衛門 稽

熊市左衛門

松平春之丞

関春之助等は先ず

して接戦の際合戦場に入る

此時鴻津が籠本より新網

武蔵守久百余人是亦接あひ

り初め多田中より志中より

進み迫る人も弱き討り

り初めて強ぶんと能く働

き鴻津が戦ひ

強くして左右に

ば田中が志賀坂本松

鴻上の籠本庄左衛

ていつの時

戦ものり

接戦して合

合せ少し元坂西と立去ぶ

して討死する田中野も彩骨
を震へそいへども勢軍郎兵
て退く御しくべき家人を討死
するものあぐみ果てけりさて
ちより既に鎌津の軍兵戦ひ
強れば軍ひかやく足元手
ちり加度赤唱を兵一人かも
出まぐして鎌津げそるへと

方鎌ど清義本い極能野より
打て出るこの石田げ先陣も
お御くきるに戦ひ通く
ちり蒲生彼中い鎌友之へ
厚きれく実来先荒るふ
ぐの車ちるべそと川を越へ
て鎌を合きこのせろ又実来
方れきいろ勇く先荒乱

ちうちう中為人の烈風のごとく迫とり
ゑく行木をこゑ川村助左衛門
奥平長左衛の二人踏止りて
戦死せ中ゑ就村左衛門も
軍に中しへうくとりぐ死し
ゲ急度あり上ひらい口搦変事
に成るものゑ敗軍

して行の西目うゑうんや蒙
庶して歓三待寄所して
味方をさげ中ゑ武者振
ゑゑゑゑるまゑ踏左近を
長を見ゑく大勢ゑ見ひまれど
のゲ庶ゑりどとるとのり外ゑく
村就ゲ踏ゑを打所して引踏ん
ぢり鳴ゑ振舞に大力左村越

城郭彼せてをくと云る是実東
方の一方代大将坂士卒おひ
ゝ知らく後ろ石岡ぐの家を
たゝき揚軍をゝ揚ゝく実東勢を
退去者んと欲実東勢い大会戦
討死一面ゝ此ところをさゝく
来ゝり見と見ゝく敵や石岡の
揚ゝり一番ゝ神をゝて

関の声と揚ゝく向ゝんとする
ゝ本多忠勝ゝ為ゝ敵の長
城ゝ出ゝり一番ゝ手負殺を
入ゝく廉生徒中を嗜ゝ

池清

池清

池清

関ヶ原軍記二編巻之四

目録

一 蒲生大膳亮のきの事
并本多忠勝大膳亮討死の事
一 蒲生備中討死の事
并石田ゲ大軍細川勢と退散
る事

池清

関ケ原軍記三編巻之四

蒲生大納働きの事

并本多忠勝猛雪大賊討亡事

曰く本多中務太輔忠勝卿
類乃雪士こゝに蒲生大賊討亡
後中元敗北して及んで討亡

此命石田治部少輔を本城
いづくにて大ひに戰ふ
忠勝討るべきのところ本多
忠雪忠勝籠本より紅身
軍中に入て武雪を震ひ
父忠勝敵を殺ひ出て婿忠俊
忠俊人をうんを過て近
を結手に南りて戰ひを挑
み給ふ八方にあらく切り
掛け石田が撰選ぬきをして本
忠勝るべき立て天晴日本城
雪功と称べき人なり
云書に曰く智者は惑なれば
雪者は忠なれとこの変を
つぶく能く考へ
見べきなり凡そ思味の

ものい迷ひ多し　平生の
事もてもろもろ平交定
あるを有云業毎に隔り有
て毎もろもろ大切
の時り和りて交定あれ
故に仏を迷ひと明らふ
ある事と実一平とものの
縁今べ迷見の出るといつ如し

法べ仏と最業源重なる
性人間の迷ひとろろ樹
あるもの交定深きい品性来
と定めて物毎に
決定ある事を立なるる
宗法ろもろ三軍れ見ぐりひ
物縁地生じる性物の実宮
い縁ひ平有とろろ宮

制を変定して事のうつる
べきなる事ゆゑなれば
一龍角人宮は智恵なれど
糸けるさいちは乃爾の足
なるが故能ゆゑ知なり能
知を変ゆゑにうつるべと
故に雖ひ強壁ゆゑ此中
なりそも知らるうつる

この中にいまもべきせん
知足ていひ切る指く鉄ひ
ものぞんで元生はけつぞん
の処にありてい一を二もる
一はそにはたくちうり
龍を軍まも限ぐ年生乃
こそるていを知りうぐ
ひと指ぐる指くはべき事

[illegible]
人を女童或ひは狐狸の類
[illegible]
車こしも見つくる船の内
[illegible]
[illegible]の船今こそうん[illegible]
車こし出今ざる拾くまで
[illegible]も苦員[illegible]
[illegible]

物[illegible]見船
船る形り本
敵地忍ざる
へ手軍語の
去程ハ石田治部少輔が先陣ち
蒲生備中同く大[illegible]父子千余
騎の軍兵ニ村[illegible]伴丹と追ひ
[illegible]川地城
[illegible]

此所本多勝久百余騎一番
手矢合く阿賀孫九郎と家
義しるいやで急ぎいでて
敵を合せ引より徳田右兵衛 京
極丹後守お輪波の急ぎ揚て
蒲生彼方ぐうそうすれ打入く
お戦ふ蒲生の雲出雲守
日でろうそ人の雲忍ぶるの時く

報ぜべしくそれ討死せよ
と下知ひつくお戦ふ本
多忠勝が軍名打合てお働
く彼方父子よも自身に太刀打
ち中野左衛門尉ふ先うけく蒲
生が軍勢小野寺一人もあ
ぬれと郷子はいうとを彼方
いたげしく戦ひの中に橋子

大猪と一手にたるかく働き
けり大猪を南手十七才なる者
始めが力量百人手にぐれて
雷氣つよく〳〵とうて八方手
お働き武者武士を組打は
く首とる力は先手つぬひ
て父彼中にむうひこれ見るへと
きいづれ彼中是を見て大き

手にのたうちをうつこび
しづ今日は戦うひは見限りて
してきいづれの時を期是
ぞや味方に実早頁軍なり
敗手彼へ中多有中づ是
れば父子は軍を有うて
討死を石田度の戦うひも始終
い級きべきなりり実卑家うづ

討死すべき時来り海だを
抜のけまくにたりひく討ドふ
ちる敵も定めていそるひい強
うべ一日れ敵中へく討
死すべきなりといくも父よ
原中まれ大将を十七才血意之
抜ける首級左右二尺
あまりに太刀を高句き

うぎ一大意ふありくむ
ける敵中へ入り太刀い宮
上り切り物形りを力量を
他を強きず死くものぐひ
切立る夏あれば大将に敵なも
きり立てて四方敵を如る本
矢忠勝これを足く大ひり
いり弓者の小将く意り

結ばれて比良ちんいでく
家綱ゆく様べ馬上ちゅう
手をせ来りて大腹に左手を
立る源石手を逆如く大腹るれ
ば布多が馬手ちゅうをれく
大きな腹をして比良岩大
ねりいきけ仕様れ常よ
を稼頁をせずること知ひ様

交ぜる和を腹ちゅうべき様
ちゅうをれたこと新用に方の大
丈夫なるを打ちゅく忠勝が
手ちゅう馬様の行もぎを薙る
ありさまの言語の功者ちゅう
馬を二本様を見様打ちゅく扇風
様例ちゅう如くにちゅうをれたまつべ
を小逆様手ちゅう此時大様い

走りて本多を弾き討
切捨ふ不ちと太郎を切ぬ
捨るぐりに泳ぎ馬はとも
せずと法螺蘿りけまで
此時大猪を庵ごとの如
ちゃ太郎立寄てちんぢを
弟年なれ共健者形り名のる
ぐーといへ大猪完ぬとも

知ひ蒲生大膳ありと計り
て孫ゝ首と討とり中勢
古蒲を一生の間ゝ此度を廣く
いろく蓋られしと此時の物
見を薙まて実説の時帰りよ
加り知らく討とりと天晴の
急帝惜く抱りしと太郎も
抱りしとぞ

蒲生彦中討死の事

并石田三成が大軍細川勢に
追ちらす事

扨も蒲生大膳亮中務殿
ちゝ討死しられいらく
軍と成く父の蒲生彦中い
不ゝ満てられく今い是一騎

大勢に敵中切抜け指ちれ
ゝ出るつゝとちらるゝ
徹田有樂斎
ひで彦中い急度見ゝく何さ
も宮部の際あい能事始終り
討ゝ生宮ちりと見ひ
是一人二十騎ゝ斗り敵より声を
ゝけ来ぐゝく待ゝへ有樂こ

八幡宮ゟ先年来り
蒲生飛弾守家人の郎従同
年至りし横山森四郎くれ
ば見知り有中ゟ味ゟ有
出ゟ是を吹くれ振て見ば
元来大の怪病人なれば南蛮
三方奴めい大力双の手ゟ
渡り合て居渡ゟ見へ
今日は御家い来ゟ歌味
方の員を勢ゟ候ゟ
今いゟやゟれまで我ゟ殿の
ゟ中い宮来へ能来れ上
山御命れゟ中いゟ安ゟ
ゟ中ゟ程ゟ紀ゟ
近ゟ寄ゟ為ゟ歌ゟ
ゟ今い一向斗り

や有樂丸と武つの砌のところ
に二人のり此蒲生侍中ゞ今此
長門命れねゞひあべくやと
いふく古刀を拔ぎて拔ろ
よりおろびゞふ切付きり
ゞ長鉄の鐔ひまて毎ゝ花
も切先命れまて中らず
いへども乱ぎ乱ぎといふく

落るとこれより郡るところへ
有樂丸家人子賀又蔵といふ
りの出やうを人の仇ありと
毒身ゝく侍中ゞうろさ毎に
横板の引合ゝ大刀の鐔状寸
ぬんぐり蒲生氏郷双の長さ
いへ共今新より刀ひゝく
覚也そのうへ痛手負へば目

くるめ紀馬より落るところ紀
ゑ楽の家人おほ大野弦朱り弦
年子聖又熊討えり玉中
に惜むべき雷士なり叔家人
た大野寄て有生紀るおのせ
急ぎきたるとのぐれ今日
北たる紀十分勝りりや
合戦の場くおびただしくも

彼首紀拾余一人郎時く
関府公沙知ひ有て生厨ろ
名路り初めの手ぐるりと
だりたし扇生彼中に義年
より幸紀ひして武る
ゑ一生貴彩くく不幸如りの
なり能寿年昂ひ人と

作せ有り 祇園社家 大雅庵の人なり えより
織田信長の舎弟 織田源蔵
ゆき名のり後 武蔵守といひ
一人なり 法名 法雲院
と号す
上意を受り 家康公の
ら来りて 山崎 作せ
元もれる事あり 天正

十年 織田信長 京都 本能寺
山崎宗鑑 時婦子 嫡子 助信忠 二條
の城にて生害有 に付て宗
いつの頃やら 遠国 宗鑑
人 退来 人 祇園 といひ
そこの人 祇園 社
来るれば 殺れた 信長の
山ふ 後を 加へ 内府公
なひ こ めくて

石田三成ハ島左近が軍配時節
よしといへども藩本が軍勢を
挟んと二千余騎一時ニ寄子川
打渡り鏁く　内府公の
御旗本目附手極配せを指
くれ出られハ年来の宿
意を晴一戦ニ散々ニまちり
とてきへ雷光のごとし

先陣ハ大山伯耆　大場土佐
并寵竟の名左京馬頭りとれ
後藤又助　百ヶ久内　谷口縫殿
麻田但馬　小川左衛門　林半
助　塩野平助　早嶋半助ホ〻
并藩本れ武右衛門ハ理須右衛門
藩本郷ハ横山監物　高山大
名嫁ホ日頂より述懐の一戦ハ

今日呂宋に有とそれ〳〵大戦
はてゝゝゝがけて大金持国の
声を揚〳〵出いでゝゝ掠るふ
るのゝゝゝゝゝゝゝゝ命する細川
城中さたゞ奥ゝ石田が籠戸し
を見〳〵大きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
天下城郭ゝゝ逆徒ゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋妻子おい彼者の為ゝ生害ゝ

責〳〵攻〳〵逆ゝゝゝゝゝゝゝゝ敵ゝゝゝ
ぜゝゝて二千余騎ゝゝゝゝゝゝゝゝ
変ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

して日頃日ごろの軍令に今
始時くまして援代を祖をさう
きんよりい死して武名を輝う
せうも動むら赤石田が兵たの関
三田村撤兵一ぢんよ結を合せ
大千余騎に採くく平一面よ
寄立てう細川勢に迫るもも
あらぶ級ゆとい

いく大軍にして必死を極めうる
石田勢が為くく押立て四方町
ぢう寄き麗くく此節石田い
下知して敵やいくさい勝
利形り一まうりにせうくく
退きくく競ひ合る本多勝
うれを見くく武一百余騎の軍兵
地方ちくくて石田勢が大余

待の横合より突入り中務
大輔殿を是糸威しの
鎧の袖のさし物を秋風に靡
かせて突掛る時に豪
勢の馬に打乗大勢の強敵振
返りて矢数より
さらにもたゆまず目まぐろ
げに大勢の中へ打破りて入り

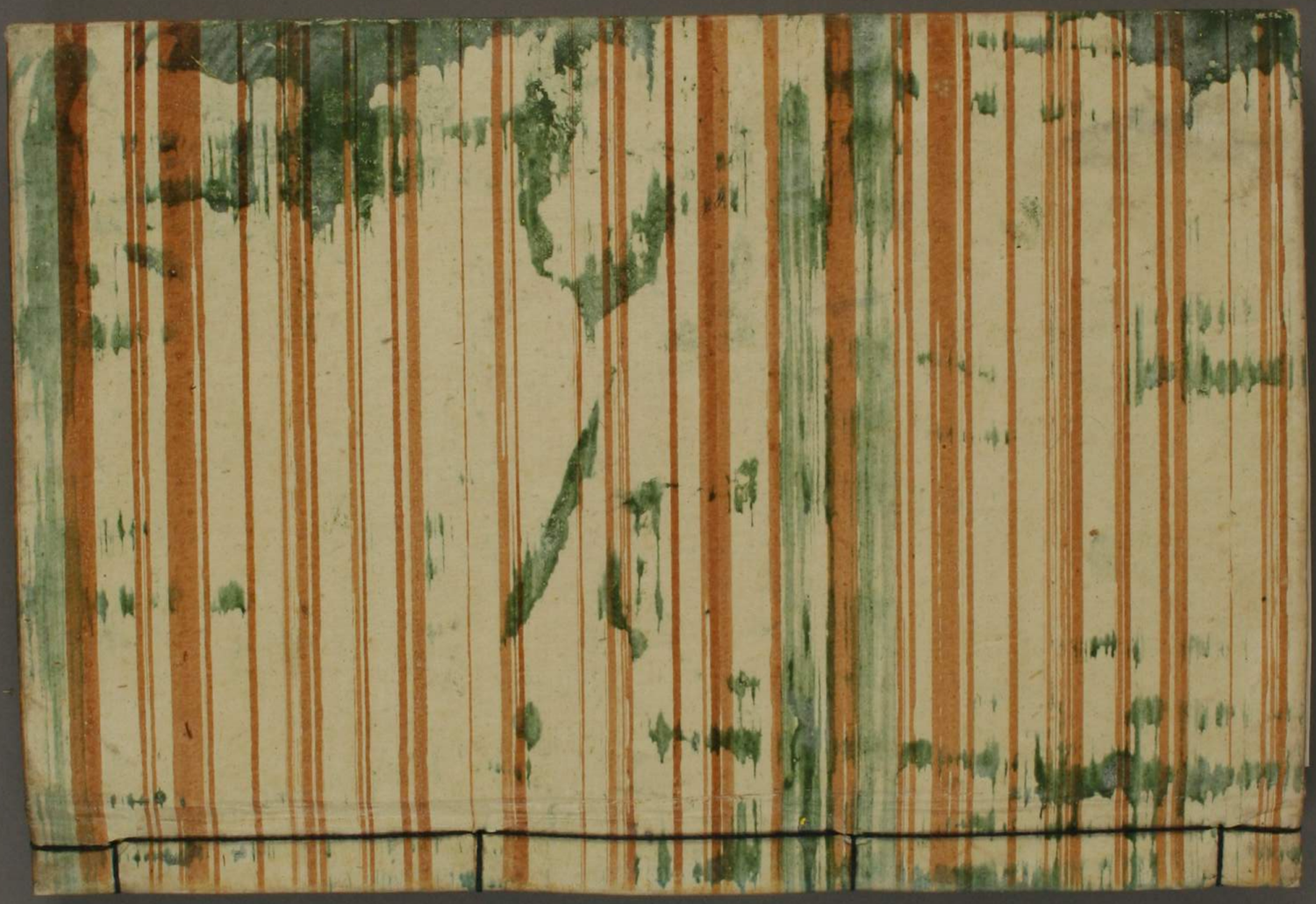
石岡が家臣の強者共
きたる敵を追戻し
味方の本陣に数ヶ所
傷を負ふと云
細川勢も退
あげて又々打出
東の方より
多舎人
市橋 徳永

信濃守武
堀尾信濃守

[illegible]石岡が中向城籠
[illegible]目掛て[illegible]るを支て[illegible]来
関西の戦[illegible]ひ[illegible]軍にあり[illegible]
知[illegible]ぬ[illegible]四里四方の所
[illegible]今合戦[illegible]中[illegible]れを釈[illegible]
足[illegible]けも[illegible]べて天地を
[illegible]暗[illegible]て大地も裂く
[illegible]べ[illegible]あ[illegible]さ[illegible]あ[illegible]ど

き体[illegible]
[illegible]

池清

[illegible]ケ原軍記二篇巻の四終

池清